

第1章

事例研究

ロカルノの信仰の亡命者について

吉田 隆

「宗教改革の余り注意されていない諸結果のなかでおそらくもっとも重要なものは、[信仰のために] 追放されて故郷を追われた何千人もの熟練手工業者職人たちによる工業力の広い普及であった。それまでまったく、すくなくとも主として、一、二の場所でしか行われていなかった工業が、いまや亡命者の定着したいるところに植えつけられた」

「ドイツの諸領邦は、西ヨーロッパ諸国から宗教的亡命者を通して繊維工業の分野におけるさまざまな刺激と新製法を受け入れた唯一の地域ではなかった。ほとんどドイツ以上にといいよほどに、スイスの繊維工業の発展はこのような[宗教的亡命者の] 来住の成果である」⁽¹⁾

「①18世紀末にチューリヒで出版された書物の記述。チューリヒ州にたくさんある、カトリックの地域とプロテスタントとの地域を両方とも見渡せる山に登ってみると、後者の地域には、新しい家屋やよく耕された畑や果樹園が示すように、勤勉と労働経済的繁栄が広がっているが、前者の地域にはそれらがまったく欠けていることが判る。②同じく19世紀半ばの書物の記述。プロテスタンティズムは多くの活力を工業から引き抜いたが、もっとも多くの活力を工業に与えた。実際われわれは、チューリヒの工業を、ルター派の信仰から区別して改革派の信仰と関連づけることができる」⁽²⁾

「宗教改革と経済生活との間に生じた精神的な関連の検討に基づいて考察される場合にはじめて、究極のもっとも深い根拠において、その著しい影響を把握することができるでありましょう。事情に精通した方は、この指摘が、その最初の体系的な論述と解明がマックス・ヴェーバーという偉大な名前に結びつけられるあの関連を狙うものであることをご存じであります。ヴェー

バーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という当時において意表を突かれたような、驚くべき斬新で人をひきつける気持ちをおこさせた題名の一論文の中で、それまで対立する両極と見なされがちであった2つの現象の複合の局面を結びつける糸を発見してから丁度1/4世紀が経過しました。さまざまな学問の専門領域でたたかわれた活発な論争の結果、ヴェーバーの得た結論はその核心において確認されました。この命題に対して向けられた攻撃は、この命題の創始者自身が与えた形式に対して向けられたというよりも、この命題が熱烈ではありますが注意深く考慮しない信奉者の手に受け入れられた時にとった形式に対して向けられたのです」⁽³⁾

はじめに

W・ボードマーは、1550から1700年にかけてスイスに亡命した移住者がその後のスイス経済に与えた影響についての論文で (Bodmer, Walter, *Der Einfluß der Refigianteneinwanderung von 1550-1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zurich, 1946. S.7-8)、「現在知りうる文献からスイスの経済的發展を近隣の経済史関連づけて論究」のなかで次のように述べている。⁽⁴⁾

スイスは、その歴史的な経過において、現代にいたるまで亡命者にとって度々避難場所にされている。連邦の建設以前から政治的亡命者、宗教的亡命者を受け入れてきた。・・・宗教改革以来、亡命者の多数は、自己の信仰と同じくするスイスの改革派の地域に一時的に滞在するか、または永続的に定住することをおこなった。

したがってスイスにおける亡命者の移住はその後のスイスの人口の歴史的な動態の一部を形成することになる。

ジュネーヴに移住した信仰の亡命者がその地で果たした偉大な精神的な重要性は、ジャン・カルヴァン (Calvin, Jean, 1509-1564)、テオードール・ベザ (Beze, Theodore, 1519-1605)、ギヨーム・ファレル (Farel, Guillaume, 1489-1565) の存在からも十分理解できる。

また、スコットランドの宗教改革者のジョン・ノックス (Knox, John, ca.1514-1572) とアングロサクソン世界の他の重要な宗教上の改革者ならば

にヴァルド派は短期間であれ長期間であれジュネーヴや他のスイス諸地域に滞在した信仰の亡命者であった。・・・

16世紀前半のスイスの急激な政治的興隆に経済的発展は歩調をそろえなかった。・・・300年以來の初期資本主義的企業・経営形態の下、高度に発達した繊維工業をもち、ヨーロッパ大陸で文化的に最も発達した国イタリアとの接触は、フランスとの対立が原因で経済的にさらなる発展は閉ざされていた。・・・ところがしかし、16世紀から17世紀にかけてスイス北部の近隣の商工業が衰退し早期の重要性を失ってしまうのであるが、スイス盟約者団の改革の諸邦では商工業が亡命者の影響のもとで思いもよらない全盛・繁栄をえることになる。

16世紀に始まる宗教改革は、社会的規模の強力な宗教運動としてヨーロッパの国民生活全体に革新を及ぼし、中世の絶対的權威であった教皇の支配を根底から覆し、教会分裂を引き起こした。

一方、異端審問所の設置（1542年）とトリエント公会議（1545～63年）を契機に、カトリック側の対抗宗教改革（Gegenreformation）が進み、ヨーロッパに宗教的動乱の時代が到来した。

この結果、対抗宗教改革のもとで容赦の無い弾圧が新教徒（やユダヤ人）にたいして行われ、ヨーロッパの各地で、自己の信仰を保持し、迫害から逃れるために故郷を後にして亡命した人々、いわゆる「信仰の亡命者」（Glaubensflüchtlinge）の大移動が生じた。

ヨーゼフ・クーリッセル（1878-1934）は、女王メアリーののもとで迫害されたイギリスの新教徒、異端審問によってスペインから追放されたユダヤ人（マラノス）、アルバ公の恐怖政治のもとで圧迫された南ネーデルランドの人々、ロカルノから追放されたイタリア人、などの信仰の亡命者が、新技術、新販路（技術・産業の移転）をもって移住したことについて述べている。⁽⁵⁾

また、フランスでも聖バルテルミーの大屠殺（1572年）、そしてナントの勅令の廃止（1685年）後の主にフランス南部からのユグノーの移住（「商工業者の民族移動」）が生じた。

マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

(Weber, Max, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1, Tübingen, 1920, 大塚久雄訳、岩波書店、1988年、31頁)で「カルヴィニストのディアスポラ(散住)」を「資本主義経済の育成所」《Pflanzschule der Kapitalwirtschaft》としたゴータインの指摘を正しいと指摘した(大塚訳、前掲書、31頁 Weber, a.a.o., S.27)。また、ヴェーバーは、ロカルノからチューリヒに移住したプロテスタントの家族ムーラルトや、キャヴェンナ出身のファミリーほかがチューリヒにおける近代に独自の資本主義的(産業的)発展の担い手となったと指摘している。⁽⁶⁾

上述の後で、J.ケーリッセルも17世紀から18世紀にかけてスイスの繁栄する工業は、ほとんどまったく入国した外国人から起こったこと、そしてスイスでは、チューリヒの絹織物工業は、ロカルノからの改革派の信仰の亡命者によって、他のすべての重要な工業部門はナントの勅令の廃止(1685年)後のフランスのカルヴァン派ユグノーによって、すなわちバーゼルのリボン織業、ヌーシャテルの編物業、ジュネーヴの時計工業などはナントの勅令廃止後にフランスから来住したユグノーによって、それぞれもたらされたと指摘している。がそうであると述べている。またR.ブラウンも17世紀にチューリヒで社会的・政治的勢力を高め、さまざまな手工業ツunftのなかで重要な地位を占めるようになった一群の織物商人たちのなかには、企業家的能力を特に豊かに備えたプロテスタントの亡命者がいたと指摘している。⁽⁷⁾

1 ロカルノからの信仰の亡命者

ロカルノの宗教改革と改革派の亡命

スイスへの亡命者の「散住」には、つぎの四つの波があった。

- ① 女王メアリーの迫害によるイギリスからの亡命者。
- ② ロカルノからの亡命者。
- ③ 聖バルテルミーの大虐殺後のフランスのユグノーの亡命者。
- ④ 三十年戦争勃発時の近隣諸国からの亡命とルイ14世によるナントの勅令廃止後のフランスからのユグノーの亡命である。

これらの亡命者の来住は、スイスの人口動態に反映している。

W.シュニーダーは、ロカルノ人の来住によって絹織物と毛織物の取引の発展は都市チューリヒの人口を8000人から9000人も増加させ、16世紀末以来の1万人近い急激な人口の伸びは、その結果であること、そして1611年と1629年のペストの流行もチューリヒの人口を一時的に減少させたにすぎないと指摘している。また、H.ナープホルツも、16世紀末以降のチューリヒの経済的躍進はロカルノ人による外からの<衝撃>に負っていると述べている。⁽⁸⁾

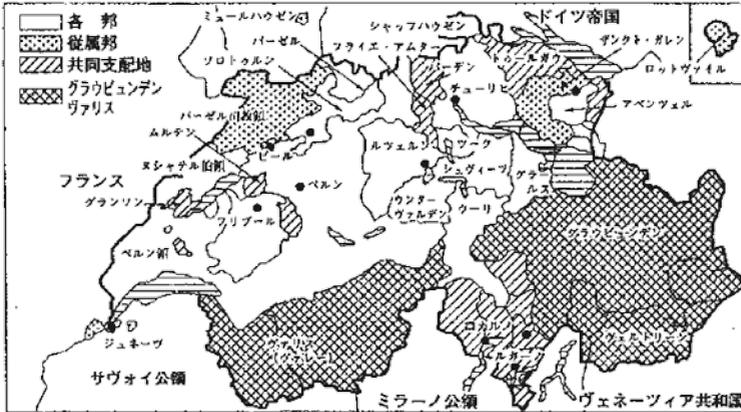
ロカルノからチューリヒへの亡命者の「移住」が開始されたのは1555年である。

今現在のスイスイタリア語圏は、1441年当時、レーヴェンティーナはウーリに従属、1496年ブレニオ、1499年リヴィエラ、1500年ベリンツォーナはウーリ、シュヴィーツ、ニーダヴァルデンに従属していた。

ロカルノもまたスイス盟約者団（ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン、ルツェルン、チューリヒ、グラルース、ツーク、ベルン、フリブル、ソロトゥルン、バーゼル、シャフハウゼンの「一二邦同盟」）が1512年にパヴィア戦役によってフランス軍をロンバルディア平原から駆逐し、ミラノを征服することによって、ドモ・ドッソーラ、ルガーノ、メンドリシオ、キャヴェンナとともにミラノ公国から得た「共同支配地」Die gemeinen Herrschaftenのひとつであったのである。これによってスイス盟約者団は、北イタリアの穀物輸入、すなわち北イタリアの穀倉地帯とその輸入路を確保し、念願の穀物不足を解消することができた。⁽⁹⁾

盟約者団の共同支配地の統治、すなわち現在のスイスのイタリア語圏ティチノー州周辺地域のスイス化は、盟約者団に参与する邦（カントン）が任命する二年任期の代官（Land-Vogt）によって行われてたが、しかし、そこには宗教改革の結果として、カトリックの邦と改革派の邦との政治的、宗教的利害の対立が投影されていた。1529年の「カッベルの和議」でもチューリヒは、ツヴィングリが主張していたウーリー、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン、ルツェルン、ツークのカトリック邦の領域内での福音主義の自由な説教を承認させることができなかつたから、カトリック邦の支配領域内の共同支配地でも福音主義からの自由な説教は承認されていなかつたのである。⁽¹⁰⁾

従って、スイスの宗教改革運動は、緩やかな諸邦の連合体であったスイス
 盟約者団に新たな分裂の原因を与え、やがてチューリヒ、ベルンを中心とす
 る福音主義派と中央部スイスカトリック諸邦との亀裂が生じることになる。



出典：森田安一『スイス』刀水書房，1980年，87頁より。

ところで「世俗権力の保護も人民の支持」も得られない知識階層の運動で
 あったイタリアの宗教改革運動のなかで、⁽¹¹⁾ ロカルノは宗教改革の思想的立
 場のピエトロ・マルティーレ。ヴェルミーリ（1500-62）やベルナルディーノ・
 オキーノ（1487-1564）らの影響を強く受けていた。

1530年、チューリヒ市参事会は、ロカルノの代官に現金出納係ヤコブ・ヴェ
 ルトミュラ（Werdmuler, Jacob, 1481-1559）を任命した。

ヴェルトミュラは、カトリックの諸邦が敵視するなかで福音主義の立場
 から宗教改革の思想をロカルノで唱導する。

1542年に代官になったグラルースのヨーアヒム・ベルデイ（Baldi, Joachim,
 1527-1571）は、ロカルノの学者で司祭でもあったジョヴァンニ・ベカリア
 （Beccaria, Giovanni, 1511-1580）に出会う。ベカリアは、1535年から聖フラン
 チェスコ派の修道院で学んでいたが、ツヴィングリの後継者、ハインリッヒ・
 ブリンガー（Bullinger, Johann Heinrich, 1504-1575）やキリスト教徒による
 最初のヘブル語文法書『ヘブル語読解の手引き』（1490年）を出版したコンラー

ト・ペリカン (Pellicanus, Konrad, 1478-1556) らの著作の影響を受けていた。

ベカリアは代官ベルディとの親交を結び、ベルディから財政的援助を得てさらに改革派の著作物にふれることで、自分の神学的立場を改革派へと転じていく。

この過程で、彼はロカルノの有力者や名家の子弟、彼らの両親たちや他の賛同した人たちをも改革派の運動へと引き入れていくのである。

その主だったファミリーが、ムーラルト家、オレリ家、デュノ家などである。やがて1548年には、ロカルノの改革派は、推定200人～211人、全住民の約1割になった。

ベルディの後任の代官は、ベカリアと公開討論を開催したが、カトリックの演説家が論破されると、これを中止してベカリアたちを拘禁した。しかし、武装した青年たちの要求を容れて彼を釈放した。ベカリアは、プリンガーのいるチューリヒへ逃れた。

1550年の秋、ロカルノの市参事会と住民はカトリックの信仰を固守する声明を出し、バーゼルとシャフハウゼンは、カトリック地域での少数派プロテスタントの信仰は容認されない、というカッペルの和議に拘束され、ベルンはロカルノの改革派にたいする武力行使を準備していた。しかし、チューリヒだけがこれに抗議し、ロカルノの改革派の生命・財産を守る用意をしていた。

1554年11月7日、ロカルノの改革派の信仰共同体は、チューリヒ、ルツェルン、ベルンの三都市に団結を要請する書簡を送った。

同年11月18日に盟約者団会議は、カトリックの信仰に戻る意志のないものは全財産を持って次の懺悔火曜日までにロカルノから出ることを決議したが、チューリヒはこの評決を破棄した。その翌年、1555年1月、カトリック諸邦の代表がロカルノに現れて120人の改革派の人々を召喚したとき、改革派の人々は、自分たちの信仰について次のように述べている。

「この教義は、多くの歳月のあいだ説教者たちによってわれわれに講解されてきた。神への絶えざる祈りによって、神の加護を教会員のすべては追感したのである。新しがりや改革熱から我々はこの教義を受け入れたのではなく、教義を信仰することを告白したのである。ましてや、騒乱をもたらすことは、

われわれが非常にきらったことである」と。

この召喚の翌日には、ローマ・カトリックの使節リヴェルタが改革派に転じた人々をカトリックの信仰に戻すためにやってきた。

これに対して、ムーラルト家の女性バーバラ・ムーラルトは、使節の信仰と彼女の信仰の不一致を明確に主張し、使節を罪ありとしたため、立腹した使節は収監を要求したためバーバラ他ルチア・ベロ、キャサリン・ローザリナ、クララ・トマ、キャサリン・アピアーノらの女性たちは逃亡して収監を免れた。⁽¹²⁾

こうした、騒動の後、1555年1月に改革派の教義へ公然と信仰告白していた205名のうち93名が3月3日、ロカルノを離れ、同族同言語の地ロベレドに到着した。

同年3月30日には、チューリヒで亡命者の代表が住居と生計の配慮、イタリア語での説教を請願して承諾された。これ以降、ロカルノの改革派の大部分の人々は、故郷を離れてスイスの改革派の諸邦に散住を開始することになった。そしてロカルノからの「信仰の亡命者」をもっとも多く受け入れ、その結果として商工業を発展させたのがチューリヒだったのである。⁽¹³⁾

2 手工業都市チューリヒと亡命者の受入れ

亡命者たちを積極的に受け入れたチューリヒは、1336年のツunft革命以後、当時、手工業者が市政に参加した代表的なツunft都市で、スイス諸邦（カントン）なかでは（比較的）民主的な都市であった。

森田安一の諸研究（『スイス中世都市史研究』山川出版、1991年、89頁以下）によれば、都市チューリヒの市政を担っていた市参事会は以下のような種類の手工業者・職業労働者の代表者によって以下のように構成されていた。

すなわち、(1) サフラン Safran 小売商人、行商人 (2) 仕立屋 Schneider 裁断師、裁縫師、毛皮匠 (3) しじゅうから Meise ブドウ酒店主、ブドウ酒呼売人、ぶどう栽培人、馬具匠、画工、仲買人 (4) パン屋 Weggen パン屋、粉屋 (5) 天秤 Waag 毛織工、打毛工業、粗羅紗織業者、帽子工、亜麻布職工、亜麻布商人、漂白職人 (6) 鍛冶屋 Schmiden 鍛冶屋、刀鍛冶、錫鑄工、鑄鐘工、ブリキ職人、兵器鍛冶工、理髪師兼外科医、浴場主 (7) 鞣皮工 Gerwe 鞣皮工、

白鞣皮工、羊皮紙工 (8) 雄羊 Widder 肉屋、ラントで家畜、牛を購入し、屠殺に従事する者 (9) 靴屋 Schuhmachern 靴屋 (10) 大工 Zimmerleuten 大工、左官、車大工、ろくろ師、材木商人、たる匠、市内に居住するブドウ摘み人 (11) 船乗り Schiffleuten 漁師、船運業者、車挽き、綱製造人、運搬業者 (12) ラクダ Kämbel 庭師、油商人、(古物、バター、チーズ、卵、家禽等を販売する) 小売業者である。

商工業の営業は、ツunft規制で拘束されていて、しかもこの拘束は、15世紀の初めには5万5千人いたと推定される選任5万5千人農村にも及んでいた。

チューリヒが1351年にスイス盟約者団に加入し、15世紀にハプスブルク家との対立を鮮明にする経過で交易上の販路が断たれ、チューリヒの織物工業は衰退していた。

「チューリヒは都市国家であった。13邦の圏内で、<主要邦>であったが、政治的にはベルンより意義が小さく、経済的、文化的にはバーゼルより劣っていた」。

「人々は農業と局地的商取引で生計を立てていた。それに加うるに、都市及び農村部には年金と傭兵勤務が生計の手段としてあった」。⁽¹⁴⁾

チューリヒは14世紀にはヨーロッパで有数の織物工業の中心地であったが、15世紀にスイス盟約者団に加入してハプスブルク家と敵対した結果、その販路を断たれ、チューリヒの織物工業は衰退の傾向にあった。

この織物工業の衰退は、織物業関係のツunftである「天秤」から参事会員が一人も出ていないという事実からも理解できる。

それゆえに当時のヨーロッパでは優れた諸工業についての知識と技術に加えて幅広い市場ネットワークをもっていたロカルノ人亡命者の到来は、チューリヒ到着当初は、ツunftに阻まれて故郷での生業を営むことはできなかったが、やがて年月を経てチューリヒの織物工業の復興のみならず諸工業の発展を育成する好機となったのである。そして、それは都市チューリヒの経済構造のみならず、チューリヒ領域内の農村にも変化をもたらすことになる。⁽¹⁵⁾

J.マリニアクは、K.デンドリカーの言葉を引用してつぎのように述べている。

ルターとは根本的に異なり「ツヴィングリの宗教改革は、宗教的な変化のみでなく、倫理的、精神的、社会改革であろうとして、最後まで展開した」と。⁽¹⁶⁾

ツヴィングリは、宗教改革のなかで、スイスの傭兵制度とそれにとまなう年金制度を批判している。列国から契約金を得て、スイス人同士が敵、味方に分かれて戦う傭兵制度によって農村の労働力は損なわれ、生産活動に支障をきたす。また都市からも徒弟層が多く出かけていき、手工業に支障が出ている。⁽¹⁷⁾

ツヴィングリにとって、傭兵の出稼ぎ労働は「神の祝福をもたらす生産的な労働」とは考えられなかった。ツヴィングリは、農民の経済的破滅を傭兵制度に起因すると捉えたのである。⁽¹⁸⁾

1515年、チューリヒ領の農村では住民蜂起が起きていた。それまでチューリヒが領域支配拡大政策をとった結果、「毎年のように行われた戦争、そのための傭兵勤務の負担過重は、ラント住民の日々の生産活動をストップさせ、経済生活を圧迫していた」からである。⁽¹⁹⁾

ツヴィングリのこの主張にもかかわらず傭兵による出稼ぎは止まらなかったが、1522年1月22日にはようやく「傭兵禁止令」「年金禁止令」が市当局から出されて、違反者に厳しい措置がとられた。⁽²⁰⁾

こうして農村で傭兵制度が崩れはじめ、戦争が終わり、平和がおとずれたとき、また、都市の製造業者から副収入を得ていた農村の人々がよりいっその副業を求めているとき、ロカルノからの亡命者が来住したのである。⁽²¹⁾

1555年3月18日、亡命者の第一陣が、つづいて5月12日に第2陣がアルプスの彼方から山岳、溪谷、湖沼、河川を經由してチューリヒに到着した。

このときの亡命者は、総勢147名で、そのなかには金利生活者と大商人13名、教師1名、法律家1名、医者2名、手工業者12名（袋物師2名、製本工1名、毛皮職人1名、製革工3名、仕立屋1名、古物商人1名、ピロード織工1名、漁師1名）などがふくまれていた。また1558年4月5日の公文書に記録されている亡命者136名は、成人男性26名、婦人26名、青年8名、男児39名、女児36名、下女1名で、全員ロカルノ生まれであった。⁽²²⁾



これらのなかに後述するようにパリシ・ア・ピアノ、ルドヴィーコ・ア・ロンコ、ガエリネリオ・カステリヨーネ、アルベルト・トレヴェーノ、パプティスタ・パティオ、フランチェスコ・ヴェルサスカ、ヨハン・アントン・フォン・ムーラルト、フォン ヨハン・アンブロシウス・ローザリノ、バルトロメウス・ヴェルザスカ、ヨハン・アントン・ローザリノそしてエヴァンジェリスタ・ツァーニーノ他がいた。

ロカルノ人の来住当時、チューリヒは切迫した失業そして生活保護を求める貧困者が増えていたこともあって、ロカルノ人の手工業者を含む亡命者の来住はチューリヒのツunftの利権と対立することは明らかであったから積極的に歓迎できなかったといえる。従って市民権は、ロカルノ人に根本的に認められず、また訴訟を請求する権利も否定され、チューリヒの都市市民の下では、彼等は外国人でしかなかったのである。

来住したロカルノ人は、絹の紡績技術についての知識を持っていたからツunftからの拘束がなければ、その技術をチューリヒの風土に順化することは可能であったであろう。またチューリヒのツunftもロカルノ人の紡績技

術についての知識を絹織物に活用することも可能だったであろう。しかし狭隘な精神のツンフトはその可能性を自ら阻んだのである。

亡命者のなかには、多種多様な手工業者が含まれていたことは、以下で整理するが、そのなかにあつて後述するように16世紀から18世紀にかけてチューリヒの経済的発展の基礎のために新しい技術をもたらしたロカルノ人のファミリーを認めることができる。ビロード織工パリス・ア・ピアノ、他である。

上記の、1555年3月18日の亡命者の第一陣と5月12日に第二陣のロカルノ人の職業別社会的構成については、1556年から1558年にかけて、チューリヒの「外国人調書」の非常に詳細な報告がある。

マイヤーのMeyer, Ferdinand, *Die evangelische Gemeinde in Locarno, ihre Auswanderung nach Zürich und ihre weitere Schicksale*, 2 Bde., Zürich, 1836のBeilageXXV, XXVI, S.375-379.によれば、多少の異同はあるが

Erste Bericht über die Gewebe der Locarner 1556年9月9日

Herr Martinus Muraltus 法学博士 手工業者 生業従事
Her Thaddeus Dunus 医学博士
Johannes Beccaria 牧師
Lodouicus Aruncus 金利生活者
Albertus Treuenus 生業不従事 裕福
Baptista de Babis 生業不従事 裕福
Jo.Ambrosius Rosalinus 生業不従事 裕福
Franciscus Verzascus 生業不従事 裕福
Joannes Muraltus 外科医
Joannes Ant. Rosalinus ビロード織工
Aloysius Orellus 小売店
Andreas Ceuius ミラノを中心に交易に従事、多くの商品を仕入
Euangelista Zaninus 小売業
Paris Aplanus ビロード織工
Jacobus Ciaretus 麻布

Joannes Antonius Peyranus 手工業
 Stefanus der Fischer 手工業
 Guarnerius Castionus 活動的
 Joannes Ant. Muraltus 事業活動はしていない
 Philippus Orellus 古物商人
 Baptista Rozolus 製本職人
 Philippus Applonus 仕立て屋
 Franciscus Applanus 毛皮職人 手工業者 麻布
 Antonius und Bartolomäus Berzascus 小売商人 雑貨類をミラノから輸入

Zweiter Bericht über die Gewerbe der Locarner 1557年8月?日

Ludouicus Runcus 金 ビロード
 Anthonius Marius
 Gwarnerius Castelliacus
 Andreas Zepheus ミラノ・スイス間の交易
 以上4名は、小売商人、製革工、袋物師、毛皮職人、仕立屋
 理髪師兼外科医を含む ベネチア、ミラノと交易
 Andreas Zepherus 毛織物 羅紗
 Ludwig Runcus ?
 Jacobus Zarethus 手工業者
 Anthonius Vercascus 小売業
 Bartholomeus Vercascus 小売業
 Barttholomes Orellus 鞣皮工
 Aloysius Orell 出納係
 Bernhard Rossolus 製本工
 Franss Alpertinus 貧困
 Philip Martiost 貧困
 D. Martin Muralt ビロード織工業
 Anthoni Rosalin ビロード織業

Euangelista Zeninus 絹織物 ビロード
Anthoni Pagieran 手工業者 製革工 鞣皮業
Franciscus Michael a Planus 手工業者 毛皮職人 ツヴィングリの食客
Philip Orell 古物商人 手工業者 革、鞣革 ミラノと交易
Herr ThaddeusThunus 侍医
Herr Johans Muraltus 外科医
(Original: Staatsarchiv)
となっている。

3 ロカルナ人の生業と遠隔地貿易

チューリヒのロカルノ人の遠隔地商業については、Leo Weiszが1780年創刊の新聞*Neue Zürcher Zeitung*(以下NZZ)に1934年11月29日から12月6日、12月13日、12月20日、1935年1月3日の5回にわたって「チューリヒのロカルノ人」について連載している。



Neue Zürcher Zeitung, 1780-

故郷での生業をチューリヒで従事することができないロカルノ人の信仰の亡命者に残された唯一のことは外国人に開放されていた外国貿易、とりわけミラノとコモとの貿易に身を投じることだった。

ロカルノからの亡命者は、昔からミラノとコモと良好関係を持っていた。ミラノとコモは、チューリヒに移住したロカルノ人に原材料、半製品と染料、道具、技術的知識、などの情報を提供している。これによってチューリヒのロカルノ人は新たな取引と生産方法を利用することができ、自分たちの生活を豊かにしようとした。

15人の年金受給者と商人のうち、ルドヴィコ・ア・ロンコは、1555年のチューリヒ到着当時、生業をしていなかった。彼は1557年に仲間3人とヴェネツィア、ミラノへ出かけ布、帽子、絹、金と金製品などの他、イタリアの食料雑貨をチューリヒに紹介し、卸売りで販売し、1558年以降、事業を拡大している。年金受給者のグアネリオ・カステリオーネは、1557年にロンコと事業協力する。アルベルト・トレベーノ、パプティスタ・パディオ、ヨハン・アントン・ムーラルト、ヨハン・アムプロス・ロザリノは、裕福であったが当初は事業を行っていない。ロザリノの息子は、バーゼルの印刷工に弟子入りした。バルトロメウス・ヴェルサスカはミラノからビレッタ帽を紹介し、ツルザッハでそれを販売した。ヨハン・アントン・ヴェルサスカは丈夫な麻布（綿布）をミラノに輸出し、ルツェルンにコメをもたらした。

金利（地代・利子）生活者のヨハン・アントン・ローザリノは、ビロード製織にも関与し、1558年にプラノからベルベット製織の技術を学ぶために息子をプラノに弟子入りさせている。

ヨハン・アンドレス・ツェフィオはロンコと提携し、時には自前で鞣革、獣脂、丈夫な麻布（綿布）をミラノへ輸出し、スイスにコメを輸入している。またツェフィオは娘婿のエヴァンゲリスタ・ツァニーノに食料・雑貨類を取り扱う小売店を開いている。

1558年頃には、ツェフィオは、鉄鋼、獣脂、丈布、丈夫な麻布の大輸出商人で活躍している。

アロイス・オレリは、本来、袋物師（鞣匠）だったが、チューリヒではツンフトの反対で彼の生業は許可されなかったから、小さな店舗を開き、皮革製品、ベレッタ帽（聖職者や裁判官などの角帽）などを取り扱った。彼は、獣脂と丈夫な麻布をミラノに輸出し、スイスには、コメと石鹼を輸入している。彼は冬季にはキャンドルを売っている。1558年、オレリは、大量の鉄鋼、蜂蜜、

丈夫な麻布を輸出し、絹、ビロード、ベレット帽も販売している。袋物師匠のジャコモ・ツァレートも同様に輸出業に従事し、丈夫な麻布と獣脂をミラノに輸出し、石鹼、一種の綾織り綿布などをスイスに輸入している。1557年に移住したアントニオ・ベスッオはロンコの事業に加わって輸入業他に従事し、輸出業で成功をおさめ、ビロード、琥珀織も始める。靴屋のヨハン・アントン・パギエラーノは、皮を購入できないほど極貧で生業できず、1557年貿易業に従事する。彼は、求めに応じて高地を旅し、荒い毛面の毛皮を自前で商い、1558年にはコメと引き換えに鞣革の商いもしている。靴直し工のフランチェスコ・アルベルティーノとフィリッポ・マディアーノは非常に貧しく、穀物倉庫の付近や都市内の他の場所で仕事をしている。1556年に移住したメデキューム・タダオ・デユノは、侍医であって、ほかに生業も商業も営んでいない。1556年に移住したキルグス・ヨハン・ムーラルト、法律家マーティン・フォン・ムラルトがいる。

ムーラルトは、1557年、ビロード織業に加わり。1558年にはパリス・ア・プラノと共にビロード織業を開始する。1558年、外科医ヨハン・フォン・ムーラルトは、15世紀から絹製織と金の刺繍が行われていたノイマーケットのモウレンコップに家を購入している。教師のヨハン・ベカリアは、極貧だった。古物商人のフィリッポ・オレリは、1557年、店舗を持たないで皮革製品と模様のない丈夫な麻布をミラノへ、スイスにはコメを運ぶ。1557年末に、オレリはシュツレウ通に小さな店を開き、蠟燭と石鹼を販売、1558年には獣脂を輸出し、コメと石鹼を輸入した。製靴工のパギエラーノと提携している。丈夫な麻布をベルガモへ輸出しようとするがうまくはいかなかった。商品は、好感を持たれなかった。

仕立て屋のフィリッポ・ア・プラノは生業をすることができず、ベレット帽を輸入するが、1557年にジュネーヴに移住し、ジュネーヴで生業を営む。

毛皮職人のフランチェスコ・ア・プラノも生業ができず、模様のない丈夫な麻布、粗麻糸などをミラノへ輸出し、そしてアロイス・オレリと協力してベレット帽と羊毛（荒い毛面の毛皮）の撚糸、コメをスイスに輸入している。1556年、鞣革工のバルトロメウス・オレリも生業できずチューリヒの親方の下で日雇い賃金の境遇であったが、後に靴直し工のパギエラーノと協力して

模様のない丈夫な麻布をミラノへ輸出し、ツークとルツェルンにコメをもたらした。1558年、彼は、信仰の亡命者の山越えの郵便集配人をしながらパギエラーノと協力してチューリヒから毛皮、ルツェルンからバター、飲食物をイタリアへもたらしている。製本業者のパプティスタ・ロッソは病院で療養の身。漁師のステファノは、極貧。唯一、許可された手工業者は、チューリヒにおいては新種の工業でありツフと競い合うことのない、したがっての利害対立のないピロード織工のパリス・ア・ピアノだった。

パリス・ア・ピアノは、1556年、レンネンヴェクトールでピロード織業をムールルト、ロザリーノと共同で行い、1557年にはローザリノとミラノに長期滞在している。

彼は、4台の織機を所有し、ロザリーノの息子たちが2台、若いデユノが一台、そしてフランスから追放されてジュネーヴに受け入れられた父をもつフランス人が従事していた。さらに、彼にはオレリとマディアーノという2人の見習い徒弟がいた。1558年には2台の織機をフランス人に、グラウビュンデン人に一台とロカルナ人カスパール・ロンコに一台を与えて生業をおこなっていた。

パリス・ア・ピアノは自分で彼の絹に染色することを試みたことで、都市の染色工たちと衝突し、チューリヒからバーゼルへ再移住した。バーゼルでは、彼は、後に彼に続いてバーゼルに移住したアンブロジーオ・ロザリーノとバルトロメオ・フェルザスカの二人の援助でバーゼルで盛んなピロード織物工場と絹リボン織物工場をつくった。チューリヒで優れた仕事をしていたパリス・ア・ピアノはバーゼルのツフからはチューリヒのツフからのように攻撃されたり、拘束されることはなかった。

彼はリヨンと友好な関係を築き、フランスのスイス盟約者団への関税政策上の奨励（特権）をイタリアとの競争にどう利用するかを知っていた。1557年8月、彼は自分の製品にフランスの通関で特に重要な原産地証明書を提示できるよう、ピロード織の製品にバーゼル市の標識を付けるように参事会に申請した。この申請は、パリス・ア・ピアノがピロード織で地元バーゼルの人々を育成し、貢献していたことが功を奏し、また彼の嘘偽りのない、誠実であらゆる点で人を欺くことのない人柄ゆえに受け入れられた。こうして彼の製品

にはバーゼルの品質保証が付与されることになった。

パリス・ア・ピアノのバーゼルでの成功は、ビロード製織にもっと注意を払うようにロカルナ人を喚起、鼓舞を促した。なぜなら、彼がチューリヒでそうであったように。ビロード織については、都市チューリヒのツンフトは無頓着であったからツンフトからの干渉をまったく受けなかったからである。

ロカルノ人は、ビロード製織の他に絹製織についての知識はあったが、チューリヒ到着当初から絹工業に従事したわけではない。なぜならチューリヒのツンフトの下、都市の主要な産業である絹織物にロカルナ人が来住当初関わることは許されなかったから上述のように小売業、遠隔地貿易に従事したのである。もしロカルナ人がチューリヒのツンフトの狭隘心による圧迫、拘束がなければ、ロカルノ人は、本来の生業である靴屋、小売商人、鞣皮職人、毛皮職人、仕立屋、理髪師兼外科医などでチューリヒにとどまっていたであろう。したがって、亡命地チューリヒでの恵まれない境遇、悲惨さが彼らに奮起を促したのである。

すなわち生業に従事できなかったことで、彼等は遠隔地貿易を強いられたが、この遠隔地貿易に従事することで、ツンフトと戦いながら故国で学んだ技能をただ移植するのではなく富を蓄えてから新しい道を切り開く、それまでほとんど利用されていなかったスイスの繊維産業へのフランスの関税特権を知る機会をえて、これらの可能性を最初に認識し、独創的に利用し尽くしたこと、またバーゼル当局の支援のもと、上述の自分のビロード製織拡大のために直ちに実行した、パリス・ア・ピアノと他のロカルナ人がビロード製織業や絹リボン織業に参加できたバーゼルと、ツンフトによる偏狭な拘束を被ったチューリヒのロカルナ人の境遇は、まったくバーゼルと対照的であったにせよ、総じて彼らロカルナ人がその後、スイスの繊維工業に多大な功績をのこしたことを忘れることができないであろう。

【コラム】

ヨハン・シュトゥンプス (Johann Stumps, 1500-1577, 78) は、『スイス年代記』(1606年改訂版)で、チューリヒのロカルノ人の加工業者について報告している：ロカルノ人は、チューリヒでは知られていなかった、工業、ビロードと絹の製織、絹糸用の水車、絹織物、縦糸に絹、横糸に羊毛を用いた綾織りと綾織り綿布を染色する、毛織物(羅紗)、ミラノ風に織る、そして布を晒し、青色と黄色の染色をほどこす、またイタリア風にブドウで染色する方法などをチューリヒにもたらしたと。



Johann Stumps, 1500–1577, 78

この年代記の記述に拠ってチューリヒでのロカルナ人の諸産業への貢献が強調されてきた。そして後世の歴史家もこの記述にしたがい信仰の亡命者のロカルナ人が故郷のロカルナの絹織物工業をチューリヒで育成したかのように解釈したのである。そしてこの見解は、信仰の亡命者の子孫で、ゲムスベルク出身のダニエル・オレリが1683年に著したプロパガンダ本『ロカルナ人の迫害』でさらに強調されることになる。(チューリヒ中央図書館 Hs. B.31)。

17世紀半ばにオレルがロカルノに出かけた時、チューリヒへの移住後に諸工業の技術が受け入れられたことを彼は確かめたのである。すなわち、チューリヒのロカルナ人が基礎を築いた諸工業は、故郷のロカルノでは全く知られていなかった。そして、1555年の信仰の亡命者には未知であることを、彼は理解したのである。: NNZ

4 信仰の亡命者の経済活動

チューリヒは、ツンフトの利権が強かったから、スイスのほかの都市と違って大企業（会社）の創設もロカルノからの来住者に簡単に市民権を与えようとはしなかった。

チューリヒの手工業者はロカルノ人の手工業者との商取引上の競争を恐れ彼らを締め出そうとしたために、ロカルノの亡命者の一部はバーゼルなどに再移住し、そこで諸工業（ビロード織など）の発展に寄与した。

チューリヒにとどまったロカルノからの亡命者は、チューリヒに新しい経営システムである問屋制、工場制そしてマニユファクチャーを導入し、市参事会が禁止していたヴェネツィアやミラノからの穀物の輸入のほかに、織物と香料・石鹸の輸入、鉄、食料品、鋼鉄、バター、獣脂、革、金と金製品の取引など他北部ドイツの麻布の輸出を行ったのである。

1558年3月2日の参事会の決議には、亡命者たちに対して店舗の購入の禁止、市民権授与の禁止、経済活動の制限、生業は一業に限ること、市参事会の承認なしに新種の商工業に従事することはできない、などの規制が定められて

いる。しかし市民権も訴訟の権利も与えられない状況のもとで亡命者たちは地元の手工業者と対立しながら、あらゆる妨害を乗り越えてチューリヒでの経済活動を乗り越えてチューリヒでの経済活動を推し進めていったのである。⁽²³⁾

チューリヒにおける資本主義的産業の発展にロカルノからの来住者が貢献したことを明らかにしたマリニアックは、代表的なロカルノ人家族の事例研究に先立って、16世紀末から17世紀後半にかけて都市チューリヒの有産市民の資産が著しく増加していることを、1559年に導入された工業関税と1621年に導入されたポンド関税の徴収額にもとづいて実証している。この二つの税は17世紀においてチューリヒ最大の財源だった。工業関税は、カントン（邦）・チューリヒで製造されてカントンの外へ輸出されるすべての製品に課せられ、ポンド税は関税的な性格をもち、邦内で邦外の者が購入したすべての商品、邦民が外国商人から購入したすべての商品に課せられた。

表1（A）～（C）はその要約で、1618年と1641年に税率が変更されたので三期に分けて、上位の5グループに属する有産市民の数とその資産額を示したものである。

1595 / 96年には最上位の第1グループ（資産75ポンド以上）は1名（資産額109ポンド）であったのに、1663 / 64年には資産75ポンド以上の第一、第二グループは36名（資産総額1万772ポンド）と増加していることがわかる。そして、後述するようにこれら有産市民のなかに、産業活動によって産をなしたロカルノ人の家族がくいこんで成り上がっていくのである。

以下ではロカルノからの信仰の亡命者の経済活動を知るうえで再度エヴァンゲリスタ・ツァニーノ、そしてオレリファミリーを取りあげることにしよう。

エヴァンゲリスタ・ツァニーノ

1555年にロカルノからチューリヒに来住して以来、ミラノと交易を行っていたヨハン・アンドレア・ツェフィオの娘婿、エヴァンゲリスタ・ツァニー

ノは、チューリヒに新製品・新製法を伝えた亡命者のなかでひととき目立っている。多くのチューリヒ市民が新製品・新製法について彼の指導を受けている。したがって市当局のあらゆる記録にはツァニーノの名前がまっさきにみいだされる。⁽²⁴⁾

市の公文書「在住ロカルノ人家族名簿(1564年12月21日)」から弟パウロス、妻、娘2人、息子2人、イタリア人の下僕9人、そして下女1名といった彼の家族構成(1554年6月の名簿では妻、1556年の妻と娘1人)を知ることができる。⁽²⁵⁾

ツァニーノは、チューリヒ到着後、毛皮や獣脂で麻布・綿布をミラノと商取引をしていた義父ヨハン・アンドレス・ツェフィオから譲り受けた小売店で義父と同じくヴェネチアとミラノとの輸入業を始めている。具体的には彼の小売店で取り扱った商品は絹、ビロード、綾織り綿布、ビレッタ帽、スリッパ、羽毛、その他の雑貨などの販売であって、冬季にはソーセージ、キャンドル、チーズ、石鹼なども販売していた。

1557年のバーゼルのア・ピアノの成功によって、ア・ピアノのロカルナ人にビロード製織への喚起、鼓舞のなされたことによるのか、憶測の域は出ないのであるが、1558年、ツァニーノも織機2台を使ってビロードの製造を開始する。

1565年5月12日、ツァニーノは、市参事にたいして新種の工業をチューリヒに持ち込むことを申し出た。申し出の内容は、ビロード織物作業所の拡張、イタリアの手本(主にミラノ風)にならった製糸と織布の作業場の創設、イタリアの原料(繭)市場への依存から自由になるために養蚕に必要な桑の木の栽培、ミラノ風の絹、木綿、亜麻の染色場の創設と染色に必要な葉草(黄色キャベツ)の栽培などの許可申請であった。

市参事はツァニーノの申し出を承認し、セルナウで桑の栽培のための牧草地が供与され、エーテンハッハでの絹製織工場を許可した。

そして彼のこれらの計画は、その後のチューリヒ経済の初期の発展にとって決定的に重要な意味をもつことになる。

「ツァニーノの手工業は、都市チューリヒに希望をもたらした。彼は、多く

の若い男女に亜麻の乾燥法を教え、指導をおこなった。彼によって都市の手工業は栄え、多くの貧しい人々が扶養された。彼らの安らぎと生計が、十分に、糸を撚ったり、布を織ったり、生糸を巻きもどしたり、そのほかの仕事をすることによってもたらされた」とあるように、多くのチューリヒ市民が新製品・新製法について彼から指導を受けている。⁽²⁶⁾

ちょうどこの頃、参事会は、彼の功績を認めて、ツァニーノと家族、そして兄弟に市民権を、また都市の医師となっていたロカルノ人の外科医ヨハン・フォン・ムーラルトと息子ジャコモとフランチェスコにも1565年のペスト流行の際に市民やプーリンガーの治癒に当たった功績を認めて市民権を与えた。これ以降ムーラルトとツァニーノのロカルノ人の家族はチューリヒ市民として対外的に活動範囲を広げることができるようになった。

1567年にツァニーノがエーテンハッハに組み立てた製糸用の水力紡車は、直径4～5メートル、高さ2.5から3メートルの円筒の檻のようなもので、その中で巨大な紡車が回転した。檻の外側の柱に二列か三列の木製の枠が備えつけられ、その上に大きくて非常に重い紡錘がこわれやすい土台のなかにあった。紡錘は紡車からベルトによって無限に回転させられる。檻の内部にそれぞれ6つの紡錘が一定の距離で向かいあって立っていたが、その紡錘に差し込まれている糸巻きから、絹糸は小さい水平の紡車に巻かれた。その緩やかな回転は小さな紡車を大きな紡車から守った。大きな紡車は檻の内部の、垂直の輪軸近くを受けもった一人の人間によって動かされ、持続的に回転していた。主に身障者（眼が不自由）の人々が、おおかたは女性であったが低賃金で使われていた。⁽²⁷⁾

ツァニーノは、前述の新種の工業計画の遂行に必要な熟練職人をイタリアから呼び寄せている。この彼の動きについてはコモとミラノの同業者はロカルノ人たちとの競争を恐れたようである。

熟練職人の一部は亡命者であったが、大半はカトリック教徒であった。この事実から、ツァニーノは、呼び寄せたイタリア人が熟練職人で、自己の<経営>に役立ちさえすればカトリック教徒であっても改革派であっても、

信仰の是非を一切問わなかったことが理解できる。

ツァニーノが創設した綾織製造場は当時のドイツ語圏スイスでもっとも大規模なもので、集中作業所と問屋制との混合であった。綾織工業は以前からチューリヒにあって、縦糸用の亜麻糸と横糸用の綿糸が家内工業で紡がれていたが、ツァニーノは、チューリヒに模様のあるボンバジンの二重綾織の製造をもたらした。このような彼の一連の経済活動がもたらした数々の市への貢献を認め、同年、彼に市民権を与えている。これ以降1567年から1570年は、ツァニーノの経済活動の絶頂期であったといえる。

1568年、チューリヒの手工業者のあいだでツァニーノをはじめロカルノの商人、製造業者にたいする反対が起こった。手工業者のなかにはロカルノの亡命者から織布技術を習得した地元のピロード織工がいた。しかし、彼らは、技術は習得したがロカルノ人の経営方法を少しも受け入れず、根っからのツunft的態度を改めなかった。“Alt Geist”（土着のツunft精神）にとらわれていたといえる。

手工業者の反対によって同年4月22日に市参事会はピロード織工組合に関する条例を制定した。これによって、ツunft親方の資格をもたないロカルノの商人たちは自家経営することを禁止された。一経営につき4台と織機台数が制限され、大規模な企業は禁止された。しかしツァニーノだけは例外で、最大7台の織機をもつことが許された。

彼はチューリヒでの企業経営を弟のパウロにまかせヴェネツィア、コモ、ツルザッハ、リヨン、フランクフルトの大都市に商用で訪れている。

1570年4月5日、ツァニーノはイタリア風の毛織物の製造を考え、エーテンハッハに水力で動く縮絨場を建設することを計画した。このときツァニーノはイタリア風の毛織物製造法の導入とエーテンハッハでの水力縮絨場の建設の認可だけでなく、ロカルノの自分の動産を保証金として、市参事会が1500～2000クローネの資本参加をするように懇願するが、この申請は市参事会によって否決される。ツァニーノの計画を検討した評議会は市からの財政的援助行うべきでないと判断した。これには、市民からの強い反対もあった。すなわち、水力による搗き晒し機の建造は、水をせき止め、河川交通の停滞をもたらすから舟行妨害への懸念、そしてなによりも市の予算の損失が危惧

されたからである。さらに、すでにニーダドルフには、水力によるものであったかどうかは不詳であるが搦き晒し機があって同業者は競合を恐れたからである。やがて1570年を境にして彼の綾織製造は下降線をたどったようである。この間、1567年から1570年は、疑いもなくツァニーノの事業活動の頂点だったといえる。彼は不断に利益を念頭に置く企業心のある信仰の亡命者を具現しているが、気性が激しく寛容さに欠け、マルコ・ペーレッツやフランチェスコ・トゥレティーニのような寛大さや深い宗教的信念を持ち合わせてはいなかった。

1571年には資金難に陥ったにもかかわらず、彼は強気な姿勢をとりつづけ、さらに債務を大きくする。

結局、ツァニーノは1602年（1603年ともいわれる）の初めに負債を残して死去したが、彼の管理、経営方法、計画の一部は、チューリヒ生粋の市民に継承されて、一定の成果をもたらした。すなわち、彼が残した毛織物製造場は1571年にペータ・ヒルツェル、1573年にハンス・コンラッド・エミヤ、ハインリヒ・ホルツハルプ、デーヴィットおよびハインリヒ・ヴェルトミューラ兄弟に継承されて存続していく。彼らは、“Alt Geist”（土着のツunft精神）から解放されていたからである。⁽²⁸⁾

オレリ家

オレリ家は、ほかの亡命者のファミリーと同じように、信仰上の理由でロカルノからチューリヒへの亡命者であった。但し、ムーラルトの場合と違って、ほかのロカルノ人と同様に条件づきでしか都市の行政にはかかわれない、いわば制限された市民権1591年に得たのである。1555年チューリヒに来住したオレリ家の祖は、アロイジオ・オレリである。彼はチューリヒへ到着すると、最初、袋物工と小売商人になった。アロイジオは住居を店舗にして、そこで袋物、帽子そのほかの雑貨を販売し、そして獣脂や麻布もイタリヤへ送っていたようである。また、小売業では石鹼、冬には蠟燭も販売していた。彼は、毛皮職人のロカルノ人、フランシスカス・ミカエル・アプラヌスと二度ほど旅行をして、ミラノから松脂をチューリヒに送っている。

明らかに彼が営んでいた商業は小規模なものであって、多額の資本を運用するようなものではなかった。貴族出身で軍人出身の彼は中庸を守り、袋物の製造と雑貨の小売りという商売に従事していた。先述したように、この時代にチューリヒに來住したほかのロカルノ人もみな似たような境遇か、あるいはもっと悪い境遇から出発しているが、アロイジオは、こうした手工業によってオレリ家の繁栄の基礎を築き、そのうえ、その後も改革派の信仰を持ち続けたのである。

アロイジオの息子のフランツとヨハンネス・メルキオールは同様に商人となって、ミラノとのあいだで絹織物、毛織物、綿布など商業に従事した。前述のように制限されたかたちではあるが、彼らは市民権を手に入れることができた。

ヨハンネス・メルキオールは、マルチノ・ムーラルトの娘であるヴァージニア・ムーラルトと結婚し、ルートヴィヒ、マルチン、フェリックス（フェリーチェ）、ヨハンの4人の息子たちをのこした。

この4人の息子たちはチューリヒで商工業をつづけたが、なかでも、綾織（縦糸に絹、横糸に毛を使用）製造業者カスパール・ビューストの娘アンナ・ビューストと結婚したフェリックスは、1600 / 01年には初めて、第4グループ（3～7.5）で6ポンド、1617 / 18年には第1グループ（75以上）で第1位の159ポンド、1618 / 19年には第1グループ（100以上）で第1位の206ポンド19シリング、1620 / 21年には第1グループ（100以上）で第2位の287ポンド4シリング、1621年 / 22年には第1位グループ（100以上）の第5位207ポンド10シリングの関税納付者として有産市民の列に名をつらねた。

フェリックスは、1602年から15年までの間、ロカルノ人としてただ一人、その当時ルッカ出身の亡命都市貴族・商人らで構成されていた絹織物の販売で「ジュネーブでもっとも利潤の多い資本主義的な企業」であった「グラン・ポッターガ」（“Grande Boutique”）に出資し、10年間で出資額を14倍に増やした（表3を参照）。彼はそのほかに「グラン・ポッターガ」の中心人物であるフランチェスコ・トゥレットティニと会社を設立して、ドイツとオランダへ主に絹織物輸出を行っている。⁽²⁹⁾



チューリヒのオレリ・ブルーナー夫人所有の家族の肖像の板画



アロイジオ・オレリの父



アロイジオ・オレリの母

バーゼルのオレリ家所有の油絵

(出典：Die Capitanei von Locarno im Mittelalter, bearb. von Karl Meyer, Zürich, 1916.)

1618年にフェリックスが高額関税納付者の首位に立った以降、親族兄弟関係者たちも関税納付者として上位グループをたえず占め、彼らもまたチューリヒを代表する名家のファミリーとして後世に、そして今日に至るまでチュー

リヒ、バルンにその名を遺しているのである。

表 1 関税額からみた有産市民の資産の状態 (単位: ポンド)

(A)

グループ	資産額	1595/96年	1600/01年	1617/18年
1.	(75 ~)	1 (109)	1 (150)	3 (338)
2.	(30 ~ 75)	2 (80)	2 (86)	3 (146)
3.	(7½ ~ 30)	4 (53)	2 (29)	4 (53)
4.	(3 ~ 7½)	1 (6)	3 (13)	1 (6)
5.	(~ 3)	1 (2)		
計		9 (250)	8 (279)	11 (543)

上記の1595 / 96年の時点では、以下のようにロカルノ人の名前は確認できない。

第1グループ

第1位 David und Heinrich Werdmüller 109ポンド

第2グループ

第1位 Die Herren Holtzhalben 15ポンド

第2位 Hans Casapar WüstとGregorius Locher 34ポンド19シリング4ヘラー

第3グループ

第1位 Cunradt Rütlinger 15ポンド

第2位 Hans Jakob und Jörg Bebia 13ポンド

第3位 Ulrich StampferとHans Jakob Maiger 13ポンド

第4位 Theodorus Briooys 12ポンド

第4グループ

第1位 Heinrich Maiger, der Pfister 6ポンド8シリング

第5グループ

第1位 Ludwig Runggen Seligen Erben 2ポンド

ロカルナ人は、1600年以降から確認できる。

(B)

グループ	資産額	1618/19年	1620/21年	1621/22年	1632/33年
1.	(100 ~)	2 (340)	6	14 (2,676)	14 (2,483)
2.	(50 ~ 100)	5 (333)	5 (390)	10 (694)	12 (871)
3.	(10 ~ 50)	4 (45)	4 (94)	20 (534)	23 (592)
4.	(5 ~ 10)			14 (100)	20 (141)
5.	(~ 5)			35 (73)	17 (46)
計		11 (718)	15 (1,771)	93 (4,077)	86 (4,133)

(B) つづき

グループ	資産額	1635/36年	1638/39年
1.	(100 ~)	22 (6,143)	23 (7,350)
2.	(50 ~ 100)	14 (964)	10 (822)
3.	(10 ~ 50)	27 (659)	32 (784)
4.	(5 ~ 10)	30 (205)	22 (159)
5.	(~ 5)	17 (48)	14 (42)
計		110 (8,019)	102 (9,157)

(C)

グループ	資産額	1641/42年	1650/51年	1660/61年	1663/64年
1.	(150 以上)	20 (6,784)	18 (5,465)	17 (5,275)	26 (9,732)
2.	(75 ~ 150)	10 (1,095)	8 (761)	15 (1,665)	10 (1,040)
3.	(25 ~ 75)	18 (811)	21 (986)	11 (528)	13 (654)
4.	(10 ~ 25)	19 (293)	29 (467)	13 (223)	16 (255)
5.	(~ 10)	32 (179)	47 (189)	25 (109)	18 (81)
計		99 (9,162)	123 (7,865)	813 (7,800)	83 (11,762)

ムーラルト家

ムーラルト家はロカルノの高貴な貴族で、ロートリンゲンのクレメント伯爵の末裔である。宗教改革時代に一族の若干名が改革派の信仰告白をしたために、カトリックの信仰にとどまったロカルノからチューリヒに移住した。

法学博士で公証人でもあったマルティノ・ムーラルトは、オレリ家の出である妻ルクレチアと息子ロドヴィコを伴って来住した。彼と一緒に従兄弟で医者者のジョバンニ、地主のジャナトリオ・ムーラルト兄弟も来住している。彼らがチューリヒでのムーラルト一族の祖となった。ジョバンニは、チューリヒでペストが流行したときに市民のために医療活動を行ったことにより1566年に二人の息子ヨハン・ヤコーブとフランツィクスとともに市民権を獲得した。二人の息子も父と同様に医者として活動したが、父同様に本来の医者の仕事から締め出され、実業界だけが彼らの活動の場になった。

フランツィクスの息子のヨハネスは、さしあたり二台の絹糸用の水力紡車を使って仕事を始め、後にジール川沿の屋内に製糸用に一台、安物の絹糸用に三台の水力紡車を設置した。

彼は自分の企業に投資するだけの十分な財産を持っていなかった。少ない徴税額がそのことを証明している。

1611年には彼は最初の事業決算を出したが、この絹糸商会の創業資金をシュニーダーは、おおよそ2000～2500グルデンと推定している。

1613年から彼は絹糸商会とフローレット商会とを弟のアントン（Muralt, Anton, 1581-1667）と共同で経営している。

1645年のヨハネス・ムーラルトの死後、1663年までアントンは息子たちの所有する親族企業の主要出資者になった。商会は順調に成長し、アントンの死後まもなくヨハネス・ムーラルト商会として故人の息子たちに引き継がれていく。



ヨハネス・フォン・ムーラルト
 チューリヒのムーラルト家のH. ボードマー夫人所蔵
 油絵（出典：Die Capitanei von Locarno im Mittelalter, bearb. von Karl Meyer, Zürich, 1916.）

1621年の徴税簿にはヨハネス・ムーラルト商会は、絹織物と安物の絹糸製造業として載っている。

1621 / 22年の徴税簿によるとハンス・ムーラルトは納税額の第4グループ(5～10ポンド)の第11位で6ポンド8.シリング、1632 / 33年には、第3グループ(10～50ポンド)の第10位で27ポンド1シリング9ヘラーを納税している。そして1663 / 64年の納税額では第1グループ(100ポンド以上)の第6位にヨハンとアントン・ムーラルトの名で548ポンド9シリング8.ヘラー納税している(表2参照)。

このように、ムーラルト家だけでなく、オレリ家、ペスタロッツイ家など他の家族も、事業で得た富で次第にチューリヒの有産市民に成り上がっていく。すなわち先の1595～1664年間の徴税簿の5つのグループからヴェルトミューラ家その他の地元の有産市民の家族と並んでロカルノ人の繊維業者やその繊維製品を取扱う商人たちが、高額納税者であることが理解できる。

1673年、カスパー・ムーラルト(Muralt, Caspar, 1627-1718)はサフランツunftの十二人衆に選ばれ、1680年には市参事会の一員になり、また1831年にムーラルト家一族の一人ハンス・コンラッド・ムーラルト(Muralt, Hans Konrad, 1779-1869)はチューリヒの市長に選出されている。

表 2

	ハンス・ムーラルト	アントンとカスパール (ハンス・ムーラルト の嗣子)	ハンス・メルキオール・ ムーラルト
1621/ 2	6		
1622/ 3	6		
1627/ 8	26		
1630/ 1	17		
1632/ 3	28		
1633/ 4	66		
1634/ 5	78		
1635/ 6	26		
1636/ 7	122		14
1640/ 1	100		12
1642/ 3	127		10
1643/ 4	99		19
1644/ 5	105	130	8
1649/50		139	9
1651/ 2		153	10
1655/ 6		305	12
1657/ 8		298	5
1662/ 3		390	
1663/ 4		548	
1670/ 1		566	

出典：Maliniak, J., Die Entstehung der Exportindustrie und des Unternehmerstandes in Zürich in XVI und XVII. Jahrhundert, Zürich und Leipzig, 1913, S.68-100より作成

終わりに

信仰の亡命者の活動は、亡命にいたる当時の歴史的事情と彼らを受け入れた亡命先の都市の政治的・社会的諸条件によってことなるであろう。

ロカルノからの亡命者に限定してもチューリヒのみならず、チューリヒの政治的事情から、バーゼル、ベルンなどの改革派の諸都市へも亡命して、亡

命先での手工業の発展に貢献している。これらの都市での彼らの活動をチューリヒでの亡命者の活動と比較して、彼らをもたらした商工業の種類や来住後の活動とその影響の移動を明らかにすることは今後の課題であるが、我々は、亡命者が去ったあとのロカルノの商工業の沈滞とカトリック教会による規律の強化についても注意をはらうことも必要であろう。

本論で明らかにされたチューリヒの事例からは、商工業活動を行った代表的なロカルノ人が、まず最初に小売商人・行商人のツunftであるサフランツunftに加入して、小規模な手工業から始めていることが理解される。彼らは同胞間の婚姻関係を通じて結束し、後ろ盾を得て、故郷の親類やイタリア語圏との交易関係を密にしながら事業を拡大している。やがて彼らは、それによって得た富を基礎にして生粋のチューリヒ市民を凌駕し都市政治の中核へと成り上がっていく。

マックス・ヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(Weber, Max, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1, Tübingen, 1920, 大塚久雄訳岩波書店1988年)でマリアアックの研究を引用して、次のように「世界史の上では、あらゆる信仰の移住者たち……。ロカルノからチューリヒに移住してきたプロテスタントの家族ムーラルト Muralt やペスタロッツイ Pestalozzi などは、やがてチューリヒにおいて近代・・に独自の資本主義的(産業的・・・)発展の担い手となった」と指摘している(大塚訳前掲書26頁。Weber, aa.O., S.24, 50) 但しペスタロッツイは、ロカルノの信仰の亡命者ではなくロカルノと同じく盟約者団の共同支配地だったキャヴェンナの改革派の家系の出身である。

周知のように、ヴェーバーは、『倫理』論文で、近代初期の西ヨーロッパおよびアメリカの資本主義経済が発生してくる際に、その発生を担う人間諸個人を内面からそういう方向に動かしている内的—心理的起動力として作用した、そういう<エートス>が<近代資本主義の精神>だと述べた。そして、中国、インド、バビロン、古代、中世にも存在した「資本主義」には、この「独自のエートス」が、欠けていたとしてヴェーバーは<近代資本主義>と区別する(大塚訳前掲書45頁, Weber, aa.O., S.34) のだが、「中世にも存在した『資

本主義』とロカルノ人の経済的行為は事情が異なると、厳密に区別しているように思われる。

本稿の註の(6)で述べたように、1919年から20年にかけての改訂の際にマリニアク(注記15の論文)を引用して新注として加筆されたものである。1920年の『倫理』の著者序言のなかで「この版に補充したものは少しもなく、右にあげた私の反批判の中から(ごく僅かの)補充的な引用を追加して、本文のなかに、また注として挿入して、将来生ずべき一切の誤解を防ごうとしたにすぎない」こと「発表当時のこの論文の、およそ内容的に重要な見解を述べている文章で、削除したり、意味を変えたり、弱めたり、あるいは内容的に異なった主張を添加したような箇所は一つもない」(大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店1988年)と述べているが、安藤の研究は、本文の加筆(部分または全文加筆)、削除、変更、自称の変更、ゲシュペルト、引用符の変更、新注の増補、加筆と削除など、改訂がヴェーバーの言明に反して大改訂であったことを論証した。実際、ヴェーバーの妻マリアンネ・ヴェーバーの『伝記』(マリアンネ・ウエーバー著大久保和郎訳『マックス・ウエーバー』みすず書房、1961年266頁)には<足の瘤>(Fußnotengeschwulst 膨大な脚注のこと)と表現されたり、また「ずっと前から絶版になっていた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を他の宗教社会学の論文と一緒にして新しく出版しなければならなかった。そのためにはまだいろいろと手を加えねばならない」と述べているのだが。

ヴェーバーが『倫理』論文で述べている近世初頭の「資本主義の精神」と呼んできた資本主義の精神の担い手、心情の担い手たちは、「もっぱら都市貴族の資本主義的な企業家だったとか、また彼らの間にとくに多かったというわけではなかった。むしろ、向上しつつあった産業的中産者身分のなかにかえって遥かに多く見られた。・・・16世紀にもすでに事態はそれと同じだったのであり、当時成立しつつあった産業は主として成り上がり者の手で造り出された者だった」と、ここでもマリニアクの『学位』論文を踏まえて述べている(大塚訳前掲書71-72頁, Weber, a.a.O., S.50)。但し、ここでヴェーバーは、あえてふれていないが、マリニアクが指摘する「成り上がり者」は「ロカルノ人」のみを指すのではなくサフランツフトからの成り上がるヴェル

トミューラ兄弟、ハイデッカ家（鍛冶屋のツunftで鉄商人）、そしてなによりも「ツunftから成り上がっていく」（Die Emporkömmlinge aus Zünften）鞣皮工、小売商人のクンラーツ・シュルーゼ家や薬味、鉄、絹、綿花（木綿綿）小売商人のヒルツェル家、更に、ツunft出身の成り上がり者の典型的な代表者と称される木綿の生産やインド綿糸を扱ったマルチン・ベルッシンガー家（彼の家系は17世紀末に断絶）らの存在をチューリヒの16、17世紀の経済発展を捉えようとするときには見落としてはいけないであろう。

チューリヒの地元の手工業者たちが、ヴェーパーが述べるように「人は『生まれながらに』できるだけ多くの貨幣を得ようと願うものではなくて、むしろ簡素に生活する、つまり習慣としてきた生活をつづけ、それに必要なものを手に入れることだけ願うにすぎない」（大塚記65頁, Weber, *aa.O.*, S.44）という伝統主義《Traditionalism》の生活態度・心情すなわち近代資本主義以前の労働基調を保持していたかどうか明らかではない。そして、さらに「近代資本主義の精神」という新しい精神の侵入は平和なものではないのがつねであり、「最初の革新者には不信と、ときには憎悪と、道徳的憤怒の潮が浴びせかけられるのが普通」だったことは、チューリヒにおけるロカルノ人も来住当初は同様に悲惨な境遇であったと我々は理解した（大塚訳前掲書77頁, Weber, *aa.O.*, S.53）。

ロカルノ人の信仰の亡命者のみが16世紀以降のチューリヒの経済的發展を促したなどということを今現在は差し控えたい。ロカルノ人のみでなく、ルッカなどイタリア語圏から来住した亡命者、フランスから亡命したユグノーの経済活動も、それぞれチューリヒの産業発展に貢献していることを視野にいれることも必要だからだ。

しかし、16世紀後半、特に対抗宗教改革期のチューリヒに亡命したロカルノ人は問屋制と工場制そしてマニファクチャーを導入することでチューリヒの産業發展のみならずスイスの資本主義的發展にとっても多大なというか、否、決定的な役割を果たしたことを多くの先学の研究から導きだすことができるように思われるのである。

では、この問屋制と工場制そしてマニファクチャーを何処からロカルノ人はもたらしたのであろうか。L. Weiszは、ロカルノ人がテチーノからアウ

クスブルクのバルトロメウス・ヴェルザー (Welser, Bartholomäus 1484-1561) のマニファクチャーをチューリヒにもたらしたと指摘するのだが、これについては、今後の課題である。

ここで、スイスの民俗学者 R. ヴァイスの、『スイスの民俗学』(Weiss, Richard, *Volkskunde der Schweiz : Grundriss*, Erlenbach-Zürich, c.1946) に注目して拙稿を終えたい。

ヴァイスもまたヴェーバーと同じく上述のマリニアックの『学位』論文と『倫理』論文を参照して、16世紀中ごろからスイスは近隣地域とは異なり産業的、資本主義的な経済構造を形成し、18世紀になるとヨーロッパで最高度に工業化された国となった。山が多い国であるため生活は厳しかったが有り余るほどの労働力が家内工業に始まる産業の振興を押しすすめたのであると指摘している。ヴァイスは、スイスを事例にすれば、近代の個人主義の文化形成はプロテスタンティズムなくしては考えられなかつただけでなくスイスの資本主義の成立はプロテスタンティズム、すなわちカルヴィニズムによって推進されたことは十分に論証されていると指摘するのである。そしてプロテスタンティズムは疑いもなく民族的な共同体(ゲマインシャフト)の束縛を解体したと(Weiss, *a.a.O.*, S.115, 309)。

以上、本稿ではスイスにおける信仰の亡命者の活動を16世紀後半のロカルノからチューリヒへの亡命者に限定して考察し、亡命の事情とチューリヒ来住後の亡命者の経済活動を、再度、ツァニーノについて、そしてオレリ家、ムーラルト家について素描をおこなった。

今後は、代表的な亡命者ほかが出資したという「グラン・ボッターガ」(“Grande Boutique”)の事例研究を困難であるがおこなってみたいと考える。

最後に、以上の記述については、次の先学の古典的かつ基本的文献に負うことが多大である。Meyer, Ferdinand, *Die evangelische Gemeinde in Locarno, ihre Auswanderung nach Zürich und ihre weitere Schicksale*, 2 Bde., Zürich, 1836; Mörikofer, J.C., *Die evangelische Flüchtlinge in der Schweiz*, Leipzig, 1876; Bodmer, Walter, *Der Einfluss der Refugianten einwanderung von 1550-1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zürich, 1946. *Zwingliana* :

Beiträge zur Geschichte Zwinglis/der Reformation und des Protestantismus in der Schweiz, Bd. X, 1954-1958. Zürich, 1958. Mark Taplin, *The Italian Reformers and the Zürich Church, c. 1540-1620*. Aldershot, c. 2003. またスイスの歴史、特にチューリヒについては、森田安一『スイス』刀水書房、1980年、森田安一『スイス中世都市史研究』山川出版社、1991年など、同氏の多くの著作におうことが大である。また、日本での「信仰の亡命者」についての研究は、石坂昭雄「16世紀におけるネーデルランド・プロテスタントのドイツ散住—その経済史的的外観—」（北海道大学『経済学研究』27-1, 307-349頁）や諸田實「信仰の亡命者—ドイツ経済史への影響—」（神奈川大学『商経論叢』第14巻第1号, 69-93頁）ほか少数だったことから欧米と石坂・諸田論文と欧米の先行諸研究から学んできた。最近では金哲雄著『ユグノーの経済史的研究』（ミネルヴァ書房、2003年）、踊共二著『改宗と亡命の社会史』（創文社、2003年）などがある。

近代スイス経済の包括的な研究には、黒澤隆文著『近代スイス経済の形成—地域主権と高ライン地域の産業革命』（京都大学学術出版会2002年）が必読である。後に黒澤は、「スイスの工業化過程における商人と商業・金融業」（『社会経済史学』70-4, 2004年11月31頁以下）で宗教的亡命者（信仰の亡命者）の経済活動が「スイス経済史で無視しえぬ役割を演じている」と指摘している。

これら先学の諸研究に心から感謝したい。

表3 企業「グラン・ポッターガ」(ジュネーヴに設立された絹製品を取り扱う企業)の1594から1615年の発展

1. 1954年1月1日～1598年12月31日

出資者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレティーニ	9,000
ポムペーオ・ディオダーティ	1,000
オラツィーオ・ミケーリ	4,000
チェザーレ・バルバーニ	1,000
ファブリツィオ・ブルラマーキ	3,000
総資本	18,000
総収益	17,000
	年21%の収益

2. 1959年1月1日～1601年12月31日

出資者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレティーニ	10,000
オラツィーオ・ミケーリ	6,000
ポムペーオ・ディオダーティ	5,000
チェザーレ・バルバーニ	3,000
カルロ・ディオダーティ	2,000
総資本	26,000
総収益	16,000
	年21%の収益

3. 1602年1月1日～1604年12月31日

出資者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレティーニ	19,000
カルロ・ディオダーティ	4,000
ポムペーオ・ディオダーティ	3,000
オラツィーオ・ミケーリ	6,000
チェザーレ・バルバーニ	3,000
フェリーチェ・オレリ	1,000
総資本	36,000
総収益	25,000
	年24%の収益
オレリ出資額金貨	1,000フラン

4. 1605年1月1日～1609年12月31日

出資者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレティーニ	24,000
カルロ・ディオダーティ	5,000
オラツィーオ・ミケーリ	7,000
チェザーレ・バルバーニ	4,000
デオダート・ディオダーティ	3,000

フェリーチェ・オレリ	2,000
ヴィンチェンツォ・ミヌートリ	1,500
ジャコモ・ブルラマッキ	1,500
ジョヴァンニ・ディオダーティ	2,000
総資本	50,000
総収益	75,000
	年30%の収益
オレリ出資額金貨	2,000フラン

5. 1610年1月1日～1612年12月31日

出資者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレティーニ	52,000
カルロ・ディオダーティ	10,000
オラツィオ・ミケーリ	7,000
チェザレ・バルバーニ	4,000
フェリーチェ・オレリ	8,000
デオダート・ディオダーティ	3,000
ヴィンチェンツォ・ミヌートリ	3,000
ジャコモ・ブルラマッキ	3,000
総資本	99,000
総収益	44,000
	年16.5%の収益
オレリ出資額金貨	8,000フラン

6. 1613年1月1日～1615年12月31日

出資者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレティーニ	67,000
カルロ・ディオダーティ	10,000
オラツィオ・ミケーリ	7,000
チェザレ・バルバーニ	4,000
フェリーチェ・オレリ	14,000
デオダート・ディオダーティ	3,000
ヴィンチェンツォ・ミヌートリ	3,000
ジャコモ・ブルラマッキ	3,000
ジョヴァンニ・ロドヴィーコ・カランドリニー	12,000
総資本	120,000
総収益	54,000
	年15%の収益
オレリ出資額金貨	14,000フラン

注：オレリ家は、第3期（1602～1604年）からパートナーとして参加

出典：Bodmer, Walter, *Der Einflusse der Refugianteneinwanderung von 1550-1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zürich, 1946, S.151.

注記

- (1) Koch, Paul, *Der Einfluss des Calvinismus und des Menonitum auf die Niederrheinische Textilindustrie*, Krefeld, 1928, S.9, 49
- (2) Braun, Rudolf, "Protoindustrialization and Demographic Change in the Canton of Zürich", in Ch. Tilly, ed. *Historical Studies of Changing Fertility*, Princeton, 1978, pp.289-334 (高橋秀行訳「チューリヒ州におけるプロト工化と人口動態」F・メンデルス、R・ブラウンほか著、篠塚信義、石坂昭雄、安元稔編訳『西欧近代と農村』(北海道大学図書刊行会、1991年、274頁)。Braun, R., "Zur Einwirkung soziokultureller Umweltbedingungen auf das Unternehmerverhalten", in Fischer, Wolfram, hrsg., *Wirtschafts- und sozialgeschichtlich Probleme der frühen Industrialisierung*, Berlin, 1968, S.268, Anm., 46. ブラウンは、ここで、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でのヴェーバーの主張を補強している。
- (3) Aubin, Gustav, *Der Einfluß der Reformation in der Geschichte der deutschen Wirtschaft* Rede gehalten bei der Reformation in der feier der Vereinigten Friedrichs-Universität Halle-Wittenberg am 31. Oktober 1929, S.2. ここで、オバンは、「ドイツ国民全体とドイツ経済全体における外国のプロテスタント達の受容という事実」(Aubin, *ibd.* S.2) に考察を限定している。
- (4) Bodmer, Walter, *Der Einfluss der Refugianteneinwanderung von 1550-1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zürich 1946 SS.7-8
- (5) Kulischer, Josef, *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit*, Bd.2, München, 1929 (松田智雄監修、諸田實ほか訳『ヨーロッパ近世経済史 I』東洋経済新報社、1983年、29頁以下)
- (6) Weber, Max, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd.1, Tübingen, 1920, S.23-24 (大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989年、25-26頁) ヴェーバーが指摘しているこの箇所は、

1919年から20年にかけての改訂の際にマリニアック（注記15の論文）を引用して加筆され、新注として加筆されたものである。この点については安藤英治「M・ウェーバーの宗教社会学改訂について〔第一部〕」（成蹊大学経済学部『政治経済論叢』18巻1・2合併号、54頁、56頁）。なお、後述するように、ペスタロッツイ家はロカルノからの信仰の亡命者ではなくキャヴェンナの出身である。

- (7) クーリッセル、前掲書、31頁
- (8) Schnyder, Werner, *Die Bevölkerung der Stadt und Landschaft Zürich vom 14.-17Jahrhundert*, Zürich-Selnau, 1925, S.107; Nabholz, Hans, “Die Epochen der Zürichs Geschichte”, in *Zürichs Volks- und Stadtwirtschaft*, Zürich, 1928, S.15
- (9) 森田安一『スイス』（刀水書房、1980年、205頁、212頁、森田安一「スイス史から見た4『都市国家』」『歴史学研究』471号1979年、70頁）
- (10) 森田安一「ツヴィングリの新スイス盟約者団構想について」『東京学芸大学紀要』33集、1981年、119頁以下。
- (11) モンタネ・ジェルヴァーズ著、藤沢道郎訳『ルネサンスの歴史（下）』中央公論社、1982年、293頁。Mörkofer, J.C., *Die evangelische Flüchtlinge in der Schweiz*, Leipzig, 1876, S.30-31.
- (12) Mörkofer, a.a.O., S.31-35.; Stadler, Peter, “Das Zeitalter der Gegenreformation”, in *Handbuch der Schweizer Geschichte*, Bd.1, Zürich, 1980, S.578-79. Meyer, Ferdinand, *Die evangelische Gemeinde in Locarno, ihre Auswanderung nach Zürich und ihre weitere Schicksale*, 1 Bd., Zürich, 1836, Beilage XV, S.516-518.
- (13) 森田安一『スイス中世都市史研究』山川出版社、1991年、89頁以下。ここでは13のツフフトであるが、1440年に二つの「天秤」である毛織、亜麻布織は合同してひとつのツフフトになったと、氏は指摘している（同書、283頁の註185）。なお、同様に北村次一は、戦争の継続が都市の工業生産力の破壊と都市経済の不振を生み、その結果、両ツフフト間の合併整備がされたと指摘する（北村次一「チューリヒにおける農民一揆の展開」『国民経済雑誌』97巻6号、23頁）

- (14) Büsser, Fritz, *Huldrych Zwingli*, Göttingen, 1973 (森田安一訳『ツヴィングリの人と神学』新教出版社、1980年、33-34頁)
- (15) 森田、前掲書『スイス』179頁以下。
- (16) Maliniak, J., *Die Entstehung der Exportindustrie und des Unternehmerstandes in Zürich in XVI und XVII. Jahrhundert*, Zürich und Leipzig, 1913, S.60.
- (17) 森田、前掲書『スイス』、209頁以下。
- (18) Maliniak, a.a.O., S.60; Claassen, Walter, *Schweizer Bauernpolitik im Zeitalter Ulrich Zwinglis*, Berlin, 1899, S.10.
- (19) 森田安一「スイス傭兵制とツヴィングリ」堀米庸三編著『西洋中世世界の展開』東京大学出版会、1973年、440頁。
- (20) 同前論文、439頁、440頁。
- (21) Maliniak, a.a.O., S.61; Nabholz, a.a.O., S.16
- (22) Bodmer, a.a.O., S.24; “Dritter Bericht über die Gewerbeder Locarner und der übrigen Wälschen”, in Mayer, a.a.O., Bd. 2, S.380-87
- (23) Bodmer, a.a.O., S.25-29.
- (24) “Nachricht über die von Vangelista Zanino eingeführten Gewerbe” (Ex:Wickianorum yom. IX. In Bibliotheca Carolina). In Mayer, a.a.o., Bd.2, S.403-04. ツァニーノについては、そのほかBodmer, a.a.O., S.28-33を参照。
- (25) “Verzeichniss der Locarnerfamilien in Zürich, vom Jahr 1564 (Zürich, StA)”, in Mayer, a.a.O., Bd. 2, S.393.
- (26) “Nachricht über die von Vangelister Zanino eigeführen Gewerbe”, in Mayer, a.a.O., Bd. 2 S.404.
- (27) Spoerry, Heinrich, *Abriss aus der Geschichte Zürichs mitt spezieller Darstellung des Handels und der Textilgewerbe von deren Anfängen bis Ende des 16. Jahrhunderts*, Wald, 1922, S.218-19. スプエリーは、ここではBürkli-Meyer, Adolf, *Geschichte der Zürcherischen Seidenindustrie*, Zürich, 1844に依拠している。
- (28) Bodmer, *op. cit.*, S.29-33; Mayer, a.a.O., Bd.2, S.338, Anm., 84; Schnyder,

- W., *Quellen zur Zürcher Zunftgeschichte*, Bd.1, Zürich, 1936, S.329-32.
- (29) Maliniak, *a.a.O.*, S.110-11; “Zweiter Bericht über die Gewerbe der Locarner”, in Mayer, *a.a.O.*, Bd. 2, S.408-09; Monter, E. William, *Calvin's Geneva*, New York, 1967 (中村賢二郎・砂原教男訳『カルヴァン時代のジュネーヴ』ヨルダン社、1978年268頁); Bodmer, *a.a.O.*, S.67.